

第4章 研究のまとめ

1 はじめに

新しい世紀を迎え、社会の変化はますます激しく流動的であり、既存の価値観が大きく揺らいでいる中、一人一人が自らの生き方を主体的に確立することがますます必要になっている。今、教育改革は、新しい時代にふさわしい生きる力の育成を目指して加速度的に進められている。しかし、課題も大きい。「社会全体に漂う目的喪失感や閉塞感の中で、学ぶことの目的意識が見失われ、まじめに勉強したり、自ら進んで努力して何かを身に付けていくことの意義を軽んじる風潮が広がっている」(中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」と指摘されているように、子どもたちを取り巻く学びの土台も揺らいでいるのである。

このような状況を踏まえると、「自己コントロール力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方」の研究は、まさに課題解決の糸口を模索したものとする。主題設定の理由でも述べたように、子どもたちの心の問題と学習活動を結び付け、今日的な教育課題を解決するとともに、授業改善を一層推進したいと考えその研究の基盤づくりに取り組んだ。

2 成果と課題

第2章において自己コントロール力と自己肯定感にかかわるアンケートを京都府の小学校、中学校、高等学校合計3654名を対象に行った結果をまとめた。各校種ごとにその結果を考察し、発達段階に即した課題を明確にすることができた。そのなかで自己コントロール力と自己肯定感を育てる視点に立った学習指導を進めていくことの重要性を確認した。

第3章において第1年次の研究を踏まえ自己コントロール力や自己肯定感を育成する研究の視点を明らかにし、各校種において実践研究に取り組んだ。それぞれの教科における自己コントロール力や自己肯定感を育成する視点を明らかにして取り組む中で、授業改善の課題と重なる方途を考えることができた。同時に七つの実践に共通する学習の課題も浮き彫りにされてきた。

つまり、子ども同士のかかわり合いのある学習、学びの目標を明確にもち、見通し、振り返りのある学習、学び方や学びのスキルを学ぶ学習である。これらは、まさに前述した中教審答申の指摘に対する課題解決の方途の一つにもつながっていると考える。

第3章で提起した自己コントロール力と自己肯定感を育成する方策は、短期的な取組としての成果と方途であった。しかし、自己コントロール力と自己肯定感は長期的にはぐくまれてはじめて、内面化し発揮されていくことを踏まえることが必要である。

今後は、京都府の子どもの現状を踏まえ、引き続きその背景や課題を明らかにしていくことが必要であり、同時に、発達段階を踏まえた実践的な研究を取り組み、検証しつつ、その効果や留意点、課題などをより明らかにし、研究主題に迫ることが必要であると考えられる。

3 おわりに

物質的には豊かな時代であると同時に不安感の漂う転換期・変革期にあって、目標を見極め実現に向かうことのできる人間の育成が求められている。この研究が時宜にかなったものとして、新しい時代の教育における学びの土台となるよう、今後も実践に結び付く研究を創り上げていきたい。